

2016年度日本質量分析学会

功 勞 賞**木下 武氏** [Science Education Co., 博士(理学)]

木下 武氏は1968年3月に大阪大学大学院修士課程(理学研究科)を修了後、同年4月に三共(現 第一三共)(株)に入社し、同年秋に大型の二重収束型質量分析装置(JMS-01SG, JEOL)が同社におけるMS装置の第一号機として導入されたのを機に質量分析の仕事に携わるようになった。同氏は三共(株)の全研究所からの測定依頼のみならず、多くの外部機関(当時はまだ大学や研究施設で精密質量を測定できるMS装置を設置しているのはまれであった)からの依頼分析をこなす一方、質量分析器のイオン化室を試験管代わりにして、経時的にスペクトルを測定することにより化学反応を追跡し、新しい反応を見いだす手法を提案した。その手法から得られた成果を学会発表や論文発表へと発展させ理学博士号(大阪大学)を授与された。その後、米国ユタ大学のJ. A. McCloskey教授の下で核酸関連化合物に関する質量分析法の研究に従事(1980~1982年)したが、当時の米国のMS学会では新しく出現してきたFABイオン化法やタンデムMS法が大きな主テーマとなっていたことに大きく影響を受け、三共に復帰後すぐにFABイオン源とMS/MS装置の導入を計画し、1983年秋よりFAB-MS/MS法の研究を本格的に開始した。1984年のBMS談話会(南箱根)でMS/MS法に関する講演を行い、特別講演のために参加されていたF. W. McLafferty教授にお褒めの言葉をいただいて大いにMS/MS法の研究に自信を深めた。その講演を機に多数の講演依頼を受け、MS/MS法の重要性と将来性を大いに広め、日本質量分析学会の発展に大きく貢献した。同氏は関連業務を通じ職場での後進の育成にも熱心であり、たとえばMS/MS法に関する研究により共同研究者の中村健道博士(現 理化学研究所)が当学会の1993年度奨励賞を受賞している。さらに、木下氏は日本質量分析学会やBMS談話会(現BMSコンファレンス)などで数多くの発表を行うと同時に、当学会役員、学会誌編集委員、BMS研究会世話人、講習会講師などを歴任した。また、「質量分析法の新展開」(東京化学同人)や「バイオリジカルマススペクトロメトリー」(東京化学同人)などでMS/MS法による構造解析について分担執筆している。また社外の共同研究者も非常に多く、それによってもMS/MS法を国内で広めた功績も高く評価される。研究現場を離れた現在も、種々の職場でMSに関する仕事に携わっている人たちへの教育を行っており、質量分析の発展への同氏の貢献は今でも続いている。

このように、木下氏が質量分析の進歩発展および普及に長年継続して寄与したことは、日本質量分析学会・功労賞に相応しいものである。